

地域と作る演劇と日本語教育

-まほろば国際プロジェクト3年の活動を経て-

Gehrtz 三隅友子（徳島大学）

misumi@isc.tokushima-u.ac.jp

1. はじめに

「まほろば国際プロジェクト」の活動を通して、筆者は日本語教育における演劇の役割及び演劇の地域社会への貢献について、これまでに得られた知見を報告している。これらに加えて本稿では、まず3年の経緯を概観し、そして現時点での教育と演劇及び演劇的手法との関わりを確認し、さらに新たな多文化共生が求められている日本の現状を鑑み、日本語教育から地域に今まさにどのような働きかけができるのか、その可能性を考えたい。

2. まほろば国際プロジェクトの経緯

2-1. 美馬市との連携

本プロジェクトは2007年から3年にわたり、徳島大学と美馬市（徳島市より西へ33km、JR普通列車にて約1時間の距離）の連携と協力による国際交流活動である。美馬市は江戸から明治にかけて藍産業で栄えた町だが、現在は若年人口の減少といった地方都市の問題を抱えている。豪商が残した「うだつの町並み」等の観光資源以外には特に大きな産業も無く、地域住民は生活を保持するための新たな策を見出す必要に迫られている。特に近年の傾向として、本地域の中小企業は数百人単位の中国やベトナムから研修制度を利用している。また2008年からは近隣の吉野川市では、EPA経済連携協定によるインドネシア人介護士が関連施設で働き始め、今後労働者としてさらに多くの外国人を受け入れる可能性がある¹。美馬市の置かれている現状と市の方針²（四国のまほろば美馬市～だれもが住みたくなるまちをめざして～という目標）を考慮し、市の全面的な協力を得ながら、その文化財でもある協町劇場オデオン座（昭和8年に建設され、現在も地域の文化施設として利用されている）を舞台に実施にいたった。本プロジェクトは大学と地域（地方都市）の協力連携事業の一例として位置づけられる。

2-2. 3年の経過

本プロジェクトは演劇活動を最終成果とする教育活動であり、演劇に至るまでに大学内（教室）での準備と同時に、地域との関わりを構築する作業及び様々な活動を行った。詳細は資料1（2007年・2008年度）と資料2（2009年度）に記した。

2-3. 振り返りの作業-ブックレット作成-

3年目の2010年1月の演劇及び交流会をDVDに収め（過去のものも全てDVD化済み）、関わった人たちからの3ヶ月後の感想を聞き取る作業を行った。インタビューの内容は、①活動を振り返って今感じる事（思う事）②活動前と活動後の変化③これから期待すること（希望すること）の3点である。この調査内容の一部はDVDに付随させたブックレットに収録している（資料3・4）。また

DVD とブックレットは関係者及び関係機関に配布した。

3. 演劇と教育

3-1. 演劇的手法と日本語教育

最終的に演劇活動にいたらなくとも、日本語教育においては様々な演劇的手法が活用されている³。例えば、ロールプレイ、シミュレーション、プロジェクトワーク、ラジオドラマ（アフレコ・朗読劇）、スピーチ等である。そしてその特徴として、授業内やコース内で明確な役割があることを前提として次の四つの特徴が挙げられる⁴。

- ①教師側がその実施の手順と関係性を把握し実施するものであること
- ②学習者の主体的な取り組みとそれを促進する教師の役割があること
- ③身体を使いながら、言語表現のみならず自らと他者の非言語表現をよく観察すること
- ④その評価が、パフォーマンス評価（結果を振り返る）及びポートフォリオ評価（過程を振り返る）の二つを組み込み、記録することによって最終的には教師や学習者等の関わった人全てが評価に関与することができること

3-2. 演劇と教育の関わり

演劇の教育全般における位置づけに関して、渡部⁵は日本の演劇教育（演劇を目指す教育）と演劇的教育（演劇を通じた教育）を考え、富田博之（1950年代に活躍した演劇教育の第一人者とされる）の所論から次の特徴を提示する。

- ①演劇教育の定義：より広義にとらえ、単なる劇作りだけでなく、学習指導や生活指導に、また行事の劇化やロールプレイ・心理劇・幼児の〇〇ごっこ・劇・遊び等も含み、演劇を教育の方法としてとらえる。
- ②演劇的視点：演劇を独立した教科とするのではなく、全ての教育活動に取り入れるべきである。
- ③日本人の心身改革：若者だけでなく社会構成員の資質形成に演劇教育が果たす役割があり、市民性教育にもつながる。
- ④演劇教育の普及度：事例を多くすること、また演劇的教育を理解し実践していく教師を養成することを目指す。

また渡部は、演劇には上演を前提とするシアターと（theatre）と、観客に見せることを前提としない(drama)の両方が含まれていることを指摘し、これからの教育においてはドラマ・アクティビティを拡げる必要性を強く述べている。その中でドラマワークは、身体と精神・知識と体験・論理と直感・知性と感性・具象と抽象・現実と虚構・見るものと見られるものといった、二元論的にとらえられるもの間を往復しながら総合的に学ぶことのできる活動としている。まさにここでは演劇を通しての「学び」がこれまで要求されてきた「学習」ではなく、これからの社会がさらに必要とする「学び」であることを確認しておきたい。

3-3. まほろば国際プロジェクトと学び

再び本プロジェクトに戻る。三つの作品を通して留学生らが体験したことは、まず役割を演じることであり、それは自分とは違う誰かあるいは何かになって、頭で理解しそれを身体と声を使って表現することであった。しかしこれまでの教室内での演劇的手法との違いは、ドラマからシアターへの移

行であり、多くの人の前のしかも実際の舞台上で表現することであった。

日本語学習歴が数ヶ月から4年以上の上級者までの学習者にとって、日本語のセリフを覚えて演じるということは、内容の理解（日本語あるいは媒介語）→暗記→表現（身体及び言語の表現へ）→繰り返しの練習→上演と言う流れの経験である。学習者の日本語のレベルの違いによって媒介語を使うか否かや、そして日本語により注目し、方言や社会言語学的な意味を深く考えられるかといった理解の方法と深さには確かに差が見られた。がしかし、「演じるため」という点では、高い動機付けのもとに練習がなされていた。

また作品によってそれぞれの背景そしてメッセージは違う。1年目の「どんぐりと山猫（宮澤賢治作）」では、不思議な世界へ巻き込まれる主人公の一郎を5人の留学生（メキシコ・南アフリカ・ペルー・ドイツ）が場面ごとにリレー形式で演じた。

2年目の「島ひきおに（山下明生作）」では、人間と遊びたいが鬼ゆえに誰からも疎まれ相手にされず、寂しさのあまり島を引っ張り歩き続ける一匹の鬼を9ヶ国9人（ラトビア・セルビア・ケニア・イエメン・インドネシア・カンボジア・アフガニスタン・メキシコ・ドイツ）が、民族衣装等に身を包み演じた。鬼の姿をしているがために人間から疎外される立場は、「姿形（すがたかたち）が異なる」という目で見られがちな日本社会における外国人のそれを重ね合わせた人も多かった。

3年目の「狼森と策森、盗森（宮澤賢治作）」では、土地を切り拓いて生き抜く農民と話の語りを留学生が担当した。農業を通した人と自然との対話が世界共通であることを確認できたようである。

いずれも、ここでの学びは、単に日本語を学んだのではなく、文学作品から、そしてプロジェクトに関わった人との相互作用からの学びであるといえる。

4. 地域とまほろば国際プロジェクト

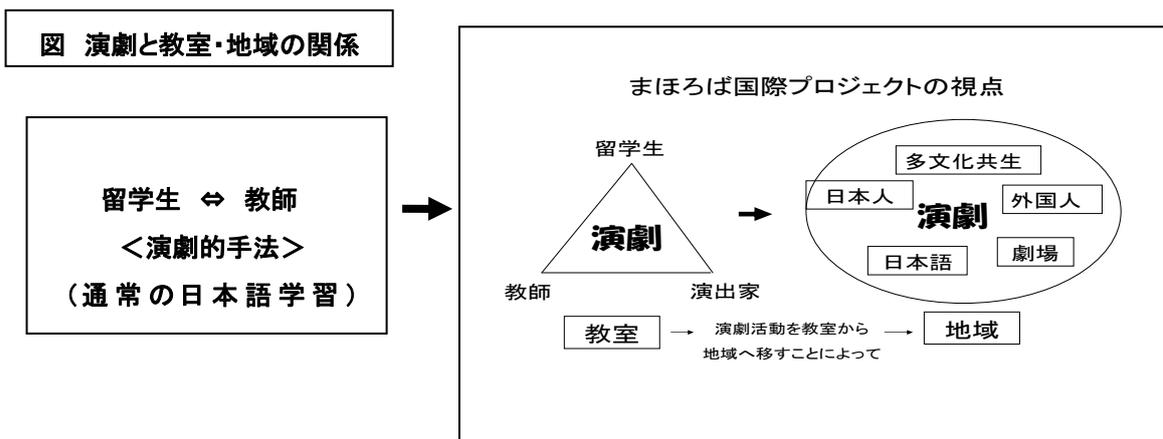
4-1. まほろば国際プロジェクトⅢの評価

2010年1月の舞台及び交流会は活動後のアンケートからも概ね好評であった。またベトナムと中国の研修生らとその受け入れ先やホームステイ等で協力を仰いだ家族からも好評を得た。前述のブックレットには、地域の日本人協力者10名、日本人学生4名そして留学生6名のコメントとして、協力して本活動ができあがったことへの喜びと、それぞれの立場からの「気づき」を載せた（資料3）。

4-2. 演劇と地域

図に示すように、通常は教室内で留学生と日本語教師が演劇的手法を通して日本語を学習するという形が存在する。それをまほろば国際プロジェクトでは、教室内の活動も行いながら、演劇を核としてその場を教室から地域へ移した。そして、特徴としては、演出家の力を借りて①劇場（空間）を交流の場あるいは出会いの場とすること②日本人と日本語学習者（外国人）が協同して演劇を作ること③演劇活動を在住外国人と観客の日本人がともに楽しむことの三つが挙げられる。

当初は留学生が地元の日本人と協力することから始め、3年目には地域在住の外国人（オランダと中国からの美馬市国際交流員）の参加も得られた。さらに観客として、地域で働く外国人15名と留学生30名が地域の日本人と交流し、触れ合う機会となりえた。



4-3. これからの課題

地域からの新たな働きかけの要請を受けつつも、今はこの活動を振り返りその反省をもとに、今後の多文化共生に関しての取り組みを考える時期が来ている。美馬市は、中国雲南省大理市と姉妹都市の協定を結び（2110年11月現在）、大理市から国際交流員を毎年1名（オランダ人交流員1名以外に専属の）受け入れている。この国際交流員を軸に海外への修学旅行も実施した経緯もある。このような外とのつながりを深める一方で、今回のまほろばプロジェクトは、現実の在住外国人を並存でなく共存へと向ける「きっかけ作り」の役割があった。大学からの働きかけの段階が終わった今は、地域自らがその可能性を拓く必要がある。イベントに終わる国際交流でなく、たとえば市民文化祭に一人の市民としてオデオン座の舞台で外国人がそのパフォーマンスを披露する、また日本人と協力して表現活動ができる、より日常の一場面となるように働きかけていきたい。

5. 教育活動としての意義

3年を経て本プロジェクトは、大きく複雑な構造を持つものになった。現段階では事実の記録とその考察が中心となっている。今後は一過性のイベントとしてではなく大きな流れを持った教育活動として、明らかにできる側面に丁寧に光を当てて分析を進めたい。今現在確認しているのは次の3点である。

- 1) コミュニケーションを目標とする日本語教育そして教育における演劇的知の有効性
- 2) 地域を学習の場とする、より多くの人を対象とする教育における演劇活動の重要性
- 3) 教師または教育に関わる者が演劇的知を理解し、さらに今後の活動を支える必要性

多文化共生を目指すこれからの社会においては、特に心と身体（からだ）を使って他者との対話を目標とする教育は必要不可欠であると考ええる。ITの技術が発達しコミュニケーションのスタイルが変わったとしても、まさに今演出家の平田オリザ氏が言うように⁶、真の対話を生み出すことを可能にする演劇教育の活用が見直される時期が来ていると思われる。

6. むすびにかえて

ことばの教育では、教師が教え学習者はある意味でことばの型を学び、それを表現しコミュニケーションをとっていくというスタイルがある。これとは別に、このプロジェクトの中では、学習者が自分の表現に何かしら違和感を覚え、目の前の相手と同じことばを使ってみようと思ったとき、前述の教育を離れさらに発展した形で「自らの日本語」を獲得するという場が与えられていた。

また3年を振り返って、舞台に立った留学生の一人ひとりを思い浮かべた際、ある学習者の姿が鮮明によみがえった。予備教育にあたる10月開始の6ヶ月コースに参加していたこの学習者は、12月段階で、体調不良とともにある理由で毎日4.5時間の学習に参加が出来なくなった。本コースとは別の個人授業による学習継続を選び、その後は本人の意思によりこれまでの復習とまほろば国際プロジェクトへの参加を中心に日本語学習を進めることとなった。教科書による学習ではなく、セリフを覚えて身体を使って表現をすることに焦点を絞った。演劇練習は他の学習者と一緒に演出家を交えて行い、そしてその他のホームステイや日本文化体験等の活動も一緒に行った。個人授業で教師側が時間が来たことを告げて終わりにしようとしたときも、「もう一度練習させてほしい」と身体表現で訴えられ、時間を過ぎて何度も繰り返したこともあった。そうして、文字学習者や他のことには関心を示さなかったこの学習者が、舞台では日本語を操って堂々と演技をし、満場の拍手を得る様子を見たとき、教師として「学ぶ」場を与えることとはどういうことかを突きつけられた気がした。2月になって学校訪問における国紹介のスピーチさらに自分の考えを述べるスピーチ（パワーポイントを使用）の練習を通して、研修最後の評価活動である「日本語でメッセージを日本人に伝える」ことができた。

この学習者と共有した体験、演劇を通して「学ぶ」ということの意味にも気づかされた。

ことばの教育に関わる者として、「学習」から「学び」につながる教育活動を今後も実践していきたいと考える。

謝辞：オデオン座と美馬市に魅せられて、そして多くのみなさんから支援を得て「まほろば国際プロジェクト」を無事終えることができました。とくしまフレンドシップ憲章の作成に関わった時点から「知り合おう、ふれ合おう、認め合おう」のことばを表す活動となりました。演者のみなさん、舞台を支えてくださったみなさん、地域のみなさんに深く感謝いたします。ありがとうございました。

参考文献：

- 栗原彬他編（2000）「越境する知1身体：よみがえる」東京大学出版
- Genre 三隅友子(2005)「初級音声教育の試み—日本人学生との会話スキット作成から朗読へ—」『日本語教育方法研究会誌』vol.12No.2, pp. 2-3
- Gehrtz 三隅友子(2006) 「学生評価から教師の内省へ向けて—教育コミュニケーションの基礎・身体関係からのアプローチを受講して—」NIME 研究報告06-20 FD形態に対する事例検討 pp. 212-237
- Gehrtz 三隅友子(2008)「地域と作る演劇と日本語教育—まほろば国際プロジェクト—」, 世界日本語教育大会 於釜山 pp. 55-58
- Gehrtz 三隅友子(2009 a)「日本語学習における身体的コミュニケーション—まほろば国際プロジェクト—」, 2009年度日本語教育学会秋季大会、pp. 141-146
- Gehrtz 三隅友子(2009 b)「日本語教育における演劇の役割—まほろば国際プロジェクトⅠ・Ⅱ—」, 第14回ヨーロッパ日本語教師学会大会報告書 pp. 92-99
- Gehrtz 三隅友子(2009 c)「地域と作る演劇と日本語教育—まほろば国際プロジェクトⅠ・Ⅱ—」 第22回 日本語教育連絡会議論文集 pp. 17-26
- Gehrtz 三隅友子(2010)「地域と作る演劇と日本語教育—まほろば国際プロジェクト—」, 日本語教育学世界大会於台北 CDデータ資料 6ページ
- 鴻上尚史 (2009)「発声と身体のレッスン—魅力的なこえとからだを作るために—」白水社

小林由利子他 (2010) 「ドラマ教育入門」 図書文化
斎藤孝 (2000) 「身体感覚を取り戻す—腰・ハラ文化の再生—」 NHK ブックス
佐伯胖監修 (2010) 『『学び』の認知科学事典』 大修館書店
佐々木倫子 (2006) 『パラダイムシフト再考』 「日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—」 アルク
末田清子・福田浩子 (2003) 「コミュニケーション学」 松柏社
竹内敏晴 (1988) 「ことばが劈かれるとき」 ちくま文庫
竹内敏晴 (1989) 「からだ・演劇・教育」 岩波新書 67
竹内敏晴 (1990) 「からだとことばのレッスン」 講談社現代新書 1027
竹内敏晴 (2001) 「思想する『からだ』」 晶文社
野口三千三 (1980) 「野口体操・おもさに貞く」 柏樹社
羽鳥操 (2008) 「マッサージから始める野口体操」 朝日新聞出版
平田オリザ (2001) 「芸術立国論」 集英社新書 0112
平田オリザ (2004) 「演技と演出」 講談社現代新書 1723
平田オリザ・北川達夫 (2008) 「ニッポンには対話がない—学びとコミュニケーションの再生」 三省堂
渡部淳 (2001) 「教育における演劇知」 柏書房
渡部淳 (2007) 「教師-学びの演出家-」 旬報社
渡部淳 (2007) 「大学生のための知のスキル・表現のスキル」 旬報社
渡部淳・ニーランズ (2009) 「教育方法としてのドラマ」 晩成社
山口創 (2003) 「愛撫：人の心に触れる力」 NHK ブックス
吉田新一郎 (2006) 「テストだけでは測れない！」 生活人新書 176 NHK 出版
鷲田清一他編 (2007) 「身体をめぐるレッスン3」 岩波書店
J. ポリセンコ・伊東博訳 (1990) 「からだに聞いてこころを調える」 誠信書房
L. クリステン・吉田新一郎訳 (2003) 「ドラマ・スキル—生きる力を引き出す—」 新評論
W. バーロウ・伊東博訳 (1989) 「アレキサンダー・テクニーク」 誠信書房

注

- ¹ 詳細は、拙著 (2009c) 「地域と作る演劇と日本語教育」を参照されたい。
- ² 美馬市ホームページ <http://www.city.mima.lg.jp/5/000049.html> の市民憲章より。
- ³ 詳細は、拙著 (2009b) 「日本語教育における演劇の役割」を参照されたい。
- ⁴ これまで行ってきた演劇的手法が、最終的な演劇活動を体験することによって特徴の4点が筆者にとってより明確に浮かび上がってきた観がある。
- ⁵ 渡部淳・ニーランズ (2009) 「教育方法としてのドラマ」 晩成社 (pp. 14、25-26)
- ⁶ 平田オリザ他 (2008) 「ニッポンには対話がない—学びとコミュニケーションの再生」 三省堂

本活動は平成 19・20 年度(財)中島記念国際交流財団助成留学生交流事業による助成金を得て、平成 21 年度には、阿波銀行学術・文化振興財団と徳島大学共通教育改善経費の助成を得て実施にいたった。

＜資料1＞まほろば国際プロジェクトⅠ	
日時・場所	2008年1月27日(日曜日)午後1時30分～ 美馬市脇町劇場オデオン座
作品	宮沢賢治作「どんぐりと山猫」 DVD有
作品内容	小学生の一郎が山猫から裁判を手伝って欲しいという依頼のはがきをもらう。山猫のために一郎は道を聞きながら山へと向かい、裁判に審判を下す。
演技指導	瀬戸嶋充・会田浩子 (人間と演劇研究所)
参加者	・徳島大学日本語研修コース6名(メキシコ・南アフリカ・ペルー・独・米) ・美馬市周辺地域住民 33名(うだつ寺子屋劇団・脇町黄門一座等)
舞台	草月流 出村丹雅草グループ
共催	美馬市 教育委員会・文化観光室
観客数	147名
実施経緯	第1回 2007年12月15日～16日 美馬市脇町にて 宿泊施設利用 ①留学生と住民40名とで活動を開始。②本読み形式で練習し、音と意味を確認。
	第2回 2008年1月18日～20日 美馬市脇町にて ホームステイ ①「どんぐりと山猫」の練習開始、役割を決定。②衣装、道具類の作成を開始。
	第3回 2008年1月26日～27日 美馬市脇町劇場にて ホームステイ ①各人の国紹介スピーチ練習 ②華道グループの舞台設営 ③最終リハーサル
まほろば国際プロジェクトⅡ	
日時・場所	2008年12月23日(火曜日)午後1時30分～ 美馬市脇町劇場オデオン座
作品	山下明生作「島ひきおに」 DVD有
作品内容	島で一人で暮らす鬼はさびしさのあまり、遊んでくれるものを探して島をひっぱって行く、ようやくたどり着いた村で受けたしうちとは～。「こっちゃん来て遊んで行け！」がセリフ
演技指導	瀬戸嶋充・会田浩子 (人間と演劇研究所)
参加者	・徳島大学日本語研修コース9名(ラトビア・セルビア・ケニア・インドネシア・カボ・ヴェトナム・アフガニスタン・独・オーストリア) ・美馬市周辺地域住民 10名(うだつ寺子屋劇団等)・徳島大学学生2名
音楽	ウベ・ワルター ドイツ人音楽家
舞台	草月流 出村丹雅草グループ
共催	美馬市 教育委員会・文化観光室
観客数	110名
実施経緯	第1回 2008年11月1日～2日 美馬市脇町にて 宿泊施設利用 ①留学生の練習を開始。②昨年参加の子供たちと母親らと身体ほぐしの練習。
	第2回 2008年12月19日～22日 美馬市脇町にて ホームステイ ① 劇練習開始、鬼を全員で演じる担当部分を決定。②衣装、道具類の作成 ③ 華道グループの舞台設営
	第3回 2008年12月23日 美馬市脇町劇場にて ホームステイ ① 午前最終リハーサル ② 阿波踊り体操・劇・歌・交流会

＜資料2＞まほろば国際プロジェクトⅢ	
日時・場所	2010年1月17日(日曜日)午後1時30分～ 美馬市脇町劇場オデオン座
作品	宮沢賢治作「狼森と笹森、盗森」 DVD有
作品内容	狼森(おいのもり)には狼たちが、笹森(ざるもり)には山男が、黒坂森には大きな岩が、そして盗森(ぬすともり)には恐ろしい魔物が、そんな四つの森とこの土地に入って暮らそうとする人間たちのやりとりの物語。人間はいつも森にたすね、森はそれに応える。そして人間を守る代わりに栗餅(あわもち)をもらう。私たちが忘れかけている自然に対する畏れ(おそれ)や自然と共生していく心を思い起こさせてくれる作品。
演技指導	瀬戸嶋充(人間と演劇研究所)
参加者	・徳島大学日本語教育演習受講生9名(中国3名・韓国2名・日本4名) ・美馬市周辺地域住民11名(地域の外国人オランダ・ドイツ・中国を含む)
舞台	草月流 出村丹雅草グループ
共催	美馬市 教育委員会
観客数	163名 (ベトナム・中国、地域の外国人エジプト・ブラジル・インドネシア・韓国・米国・スウェーデン・パラグアイ・パラオ・フィジー徳島大学留学生を含む)
実施経緯	第1回 2009年12月19日～20日 美馬市脇町にて ホームステイ ①留学生と住民で活動を開始。②本読み形式で練習し、音と意味を確認。
当日詳細	第2回 2010年1月15日～16日 美馬市脇町にて ホームステイ ①「狼森と笹森、盗森」の練習開始、役割を決定。②衣装、道具類の作成を開始。
	第3回 2010年1月17日 本番 美馬市脇町劇場にて ホームステイ ①挨拶 美馬市長 牧田久・徳島大学地域創生センター 吉田敦也 ②徳島大学 ダンスサークル「サルサブローテ」③阿波踊り体操 ④「狼森と笹森、盗森」 ⑤交流会 劇場にて(舞台)



ご支援くださった方々の声

- ・舞台：出村丹雅章さん
「オチオン座が大きな花器、その中で人が花になる大作ができて良かったです」
- ・ビデオ撮影・編集：上原芳明さん
「英語が好き！から、参加し国際交流の旗子を3年間見ることができました」
- ・黒坂森の大岩役：レムコーさん（美馬市オランダ国際交流員）
「楽しかった、本当の意味での国際交流だった」
- ・狼役：大部雅恵さん（教育委員会市職員）
「裏方だとばかり思っていたら、台詞のある役で大感謝！」
- ・村のおかみさん役：峯山トシユさん（2007年から2回目の出演）
「こんなお婆さんが若い人にまじって舞台に出ることができた！」
- ・ホームステイ先：藤本勝子さん
「日本人と韓国人の娘が新たにできて、そしてその舞台の応援ができた」
- ・当日会場運営：野口優子さん（国際交流クラブ・ベルヴェニール）
「徳島のそして美馬の歴史とそのすばらしさを再確認」
- ・当日会場運営：小林由美さん（国際交流クラブ・ベルヴェニール）
「舞台と会場がひとつに、知り合おう・ふれ合おう・認め合おうの交流が実現！」
- ・運営：西前清美さん（市職員）
「国際交流の新しい風を吹き込んで、地域を変えていくきっかけにしてほしい」
- ・運営：鍛田千恵子さん（市職員及びホームステイ先）
「外国人とハグのできる関係に、わだかまりがなくなる自分を実感」

資料3

からだレッスンに始まり、役作り、道具作り、稽古…そして本番大学の教室の中だけでは得られない多くの学びがありました。多くの出会いがありました。



人前で演じることによって人前に出ることに抵抗がなくなりました。面接でも、余裕を持って話せた気がします！

竹口 祐輔（豊民役）

初体験のことばかりで、とても面白かったです。人に何かを伝えることの難しさと楽しさを学びました。

荻 麻衣子（山男役）

留学生たちと芝居に携わって、本当に楽しかったです。

皆でひとつの劇を作っていくなかで、よりお互いを知ることができました。

津田絵理香（子ども役）

このプロジェクトを通して出会ったすべての人たちと共有したすべての時間が、人とのつながることの素晴らしさを教えてくれました。今回生まれたつながりを、今度どう発展させていくかが楽しみです！

福岡 佑子（子ども役、ブックレットデザイン・編集）

徳島大学の学生たちの声

資料 4

劇中で先頭に立ち、最初にセリフを発する役で緊張しましたが、日本のオチオン座という舞台に自分が立ち、地域の人々と一緒に劇を作り上げることに特別な喜びを感じ、最後まで楽しむことが出来ました。「吉野川」での発表は日本語を学ぶ自分にとってまたとないチャンスであり、日本人の前で日本語で発表をしたことで日本語力はもちろん自分の表現力への自信につながりました。



張逸艶 (中国)



林ナシ (韓国)

人前で自立つのが苦手な私が、ナレーションの大役を任せられ、古い日本語の言い回しや難しい練習に戸惑いながらも、いざ本番慣れない着物を着て役をやり遂げた後は何ともいえない達成感を味わいました。そして思い返すと大変な練習も、道具作りも、ホームステイも、日本語以外の大切なものを学んでいたのだと気づきました。「吉野川」では徳島の吉野川の問題について調べること、私自身の国を含め世界には同じような問題があることに気づくことができました。



權エウラ (韓国)

日本へ来てからなれない環境に対する緊張を感じていましたが、からだレツスンや劇の練習を通してだんだんと気持ち楽になりました。大学内外の人と何かをしながら学ぶことにより、日本語の勉強だけではない多くのものが得られ、自分の視野が広がったと思います。「吉野川」では自分の研究を進めるうちに吉野川を取り巻く多くの徳島の人々や活動の存在を知り、本当にたくさん刺激を受けました。



沈亞楠 (中国)

「まほろば」ではナレーション披露に対する驚きと戸惑いに加え、2人でペースを合わせることに難しさに苦心しながら、声を掛け合うことを心がけました。本番途中止まってしまった場面もありましたが、思いがけず観客の皆さんが温かいご声援を下さり、とても嬉しかったです。多くの人達の助けを借りて、ひとつのものを作り上げたことを実感しました。「吉野川」では発表後にもらった皆さんからのコメントを読んで、このプロジェクトに参加してよかったです。



エオン
ホアソンテイ
(バトナム)

「まほろば」本番当日の阿波踊り体操や、観客の皆さんと一緒に作り上げた劇は、とても楽しかったです。交流会では中国の方と日本語で話したり、美馬市の人たちとたくさん会話をしたり、プロジェクトの目標である異文化間コミュニケーションが達成されたと思います。「吉野川」の発表会にはビデオ出演という形になり、その場の雰囲気味わえなかつたことが残念ですが、もしまた機会があればもっといい発表をしたいです。



王宇 (中国)

「まほろば」は初めてのことづくでした。何よりこれが私の人生の初舞台。レツスンで大きな声を出せるようになったこと。役を通して知った日本の農家の人たちの気持ち。そして今や私の日本の家族となったホストファミリーとの出会い。本当に、感謝の気持ちでいっぱいです。吉野川についての発表も、最初は上手く出来るか不安でいっぱいでしたが、徳島の人たちにとつていかに吉野川が重要であるかを理解し、発表を通して自分自身の成長を実感しています。

「まほろば」=まほろば国際プロジェクトⅡ、「吉野川」=吉野川プロジェクト

振り返って... 「まほろば」「吉野川」西プロジェクトをやり遂げた徳島大学の留学生六人